

### § 英語のパンフレットができました §

弘前を訪れる外国人が増加している現在、郷土文学館では、外国人観光客・留学生が来館できるように、英語による展示作家紹介パンフレットを作成しました。

これで弘前出身の作家を知っていただき、観光に訪れた際の思い出づくりに役立ただけであればと思います。なお、留学生の方は、「留学生パスポートひろさき」を提示していただければ、無料で見学できますので、ぜひご来館を！

弘前出身作家の翻訳本の展示もしています。



(for example)



### Kuga Katsunan

(1857-1907)

[Political Commentator]

Born in Zaifu-cho, Hirosaki City. Kuga launched the newspaper "Nippon," in 1889. In which he took a firm stance against the government's Europeanization policy. As a journalist, he greatly influenced the younger generations of Hirosaki.

### 陸 羯南 (1857-1907) (政治評論家)

弘前市在府町に生まれる。明治22年、新聞『日本』を創刊。当時の政府の欧化政策を批判し、論陣を張る。新聞人として、郷党の後輩たちに影響を与えた。

Please come to the Hirosaki Municipal museum of literature. We are looking forward to you visiting.

# 北の文脈ニュース 第73号

Kitano bunmyaku news

## 第39回企画展 「陸羯南展」

会期：2015.1.12～2016.1.3 (会期中無休)



弘前市在府町生まれの陸羯南は、明治を代表するジャーナリストです。

東奥義塾・宮城師範学校・司法省法学校に学び、太政官・内閣の役人勤めをします。

その後、新聞『日本』を発行し、国民主義を唱え、当時の政府の政策に反対する論陣を張り、たびたび発行停止処分を受けながらも、自らの意思を曲げることはしませんでした。

そんな羯南の人柄に魅かれて、日本新聞社には、正岡子規、佐藤紅緑らが入社し活躍しました。青森県人もまた多く入社しています。病床にあった正岡子規を、終生、世話をした話はよく知られています。

また、羯南は清韓視察や、当時では珍しい世界一周の旅に出ています。その足跡を世界地図に表現しました。現地から送られた絵はがきは、当時の海外状況や風景を伝えます。

羯南のご遺族からご寄贈いただいた資料とこれまでの収集資料をできる限り展示して、羯南の生涯を伝えます。

### 陸羯南の世界一周の旅

羯南は、明治36年(1903年)にアメリカ・ヨーロッパを巡る世界一周の旅に出発します。旧弘前藩主津軽承昭の依頼で、ベルリンに留学中の近衛篤麿の実弟津軽英麿(津軽承昭養子)の帰国を説得する目的であったため、篤麿が旅費5,500円(現在の5,000万円程度)を提供しました。

6月16日に横浜港から日本郵船の安芸丸でアメリカに出発し、6月30日にシアトル港に到着。シカゴ、ワシントン、ニューヨークを通り、ニューヨーク港から船で、7月20日にベルギー・オースデンテに着き、ベルギー公使として駐在していた旧友の加藤拓川に迎えられました。ドイツ・ベルリンで津軽英麿と会い帰国の意思を確認した後、北欧をたどってロシアを見物します。その後、ドイツ、オランダ、ベルギー、イギリス・ロンドン、ベルギー、フランスなどを見物しました。

(次頁へ)



此船にて此埠頭ニ今日到着せり。船中の様子ハ今居へ手紙ニテ申置候。 六月廿日

### お客様の声

(平成26年4月からのご意見ノートより)

★毎年、年に一度来館している。来年の夏の企画も楽しみにしている。

☆受験で弘前市の作家が出るので見に来ました。過去間に出ていたので役に立ちそうです。

★駅の観光案内に貼ってあった額に手をあてる太宰治の写真が印象に残り、観に来ました。

ロケーション、安価な入場料や有料冊子、無料の資料、見やすい配置の工夫等々、見せよう、伝えようという意思を強く感じる施設・展示(ひいては観光政策)でした。来てよかった!! 石上玄一郎についての展示、特集も見てみたいです。(東京都・男性)

☆青森には沢山の文学、作家がおられたと改めて展示を拝見しました。ここで生まれた人ばかりではなく、父親の仕事の関係で少年時代の何年かを過ごした安岡章太郎や井上靖のことが知られてよかったです。青森独特の風土が育てたものなのでしょうね。ありがとうございました。(千葉県 女性)

### ちょこっと! ニュース



昨年の第38回企画展「『まるめろ』の飛翔-高木恭造展」の開催中に、近所にお住いのKさんが、2度にわたり、自宅の庭に実ったまるめろを届けてくれました。Kさんは、文学講座や講演会によく足を運んでくださる方です。そのまるめろは、よい香りを放ち、展示に花を添え、来館者を楽しませてくれました。「まるめろってどんなもの?」とよく質問されていたので、「初めて見た!」と多くの方に喜んでいただきました。Kさん、本当にありがとうございました。

Kさんをはじめ、みなさまに支えられて、弘前市立郷土文学館は今年7月で25周年を迎えます。

これからも市民によりそい、来館者に喜んでいただける文学館を目指します

左より津軽英麿、近衛篤麿公



新聞『日本』の挿絵を担当していた画家の中村不折がパリに留学しており、一緒にパリ市内とイタリア各地の美術館や寺院を巡っています。その後、エジプト・カイロを訪れ、12月16日に日本郵船の鎌倉丸に乗り帰国の途に着きました。スリランカ、シンガポール、香港を経て明治37年1月20日に神戸に到着しました。津軽英麿は2月27日に帰国しています。

船と鉄道を乗り継いでのおよそ7ヶ月の長期旅行になりました。各国から羯南が家族や友人へ宛てた沢山の絵はがきが残っています。



旅行用櫃

松山市立子規記念博物館提供  
パリで購入したもの。陸実のイニシャル  
M・K が記されている。  
縦 480mm 横 760mm 高 660mm



旅行中の羯南



本企画展では、30枚の絵はがきを、それぞれパネルにして展示しています。

散策してみませんか？

### 陸羯南文学碑

建立地 弘前市大和沢中岸田 38-1  
狼森 大狼神社裏山 鷲の巣山

アップロードから大和沢川に架かる新狼森橋の脇から、鷲の巣山に続く東北自然歩道に入ると、まもなく大狼神社の境内です。神社から15分程登ると、岩木山と弘前の街並みを見渡せる場所に陸羯南の文学碑が建てられています。弘前市内の医師・鳴海康仲さんが中心となり、昭和28年(1953)9月2日に建立されました。昭和51年(1976)9月18日に、羯南四女最上ともゑさんと、羯南養子陸四郎夫妻が初めて来弘した際、文学碑を訪れています。



あいのもり  
おおかみ  
やすなか  
たむかてんかのけん  
誰人天下賢  
試問巖城下  
此語久相傳  
名山出名士



陸羯南文学碑

### 第39回企画展『陸羯南展』図録



新聞『日本』を創刊し、明治を代表するジャーナリストとして活躍した陸羯南の伝記をまとめた一冊になっております。観覧の記念にぜひお求め下さい。

全44ページ、頒布価格500円  
文学館受付で販売しております。

## スポット企画展「作家が描いた津軽 一昭和Ⅱ」開催

期間：平成27年4月1日～6月30日

作家が描いた津軽、昭和20年前後から平成初期までに発表された作品を展示します。

佐藤愛子の『血脈』  
火野葦平の津軽「風化地帯」  
小林秀雄の弘前城の「花見」  
今日出海の「弘前の花」  
長部日出雄の「津軽じょんから節」  
今官一の『わが友 太宰治』  
日本百名山の一つ「岩木山」

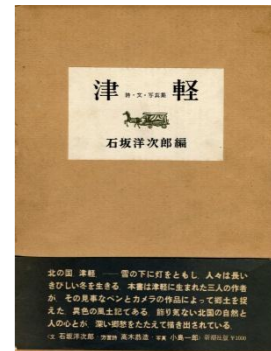
沙和宋一の『生活の探求』は弘前が舞台  
津軽ブームを巻き起こした『詩・文・写真集 津軽』  
圓地文子の「お花見」  
今東光の「わが母の記」  
五木寛之の「根の国紀行—太宰の津軽と私の津軽」  
津軽を歩いた司馬遼太郎『北のまほろば』



弘前公園下乗橋で。左から今日出海、小林秀雄、圓地文子



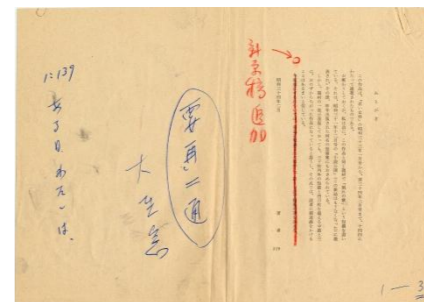
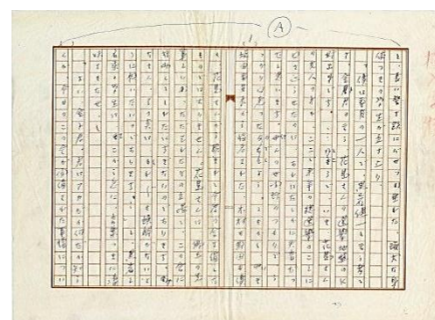
昭和3年西宮市の家で  
左から愛子、紅緑、早苗



石坂洋次郎編  
『詩・文・写真集 津軽』  
新潮社  
昭和38年10月5日刊

## 新資料紹介

●石坂洋次郎『ある日わたしは』直筆挿入原稿  
【400字詰原稿用紙 10枚、「あとがき」ゲラ見本1枚】



講談社 昭和34年3月3日刊  
装幀：宮本三郎  
(左・外箱、右・表紙)

「ある日わたしは」は雑誌『若い女性』に連載された後、昭和34(1959)年2月、講談社より単行本化されました。この原稿は、単行本刊行の際、雑誌に発表された作品に石坂が筆を加えた部分のみが書かれています。用紙の余白部分に「挿入原稿」と朱書きしてあります。「あとがき」のゲラ見本には、「新原稿追加」「要再、二通 大至急」と編集社側の指示の書き込みがあり、追加された2枚の原稿には、出版に際し何度も装幀案をやりなおしてくれた宮本三郎や担当スタッフたちへの感謝の思いが綴られています。

『若い女性』は、講談社より昭和30(1955)年に創刊された、20代の女性をターゲットとした雑誌でした。同時期に、「あじさいの歌」を『中央日本新聞』『西日本新聞』『北海道新聞』に、「寒い朝」を『週刊現代』にも連載していることから、石坂の作品が幅広い年齢層に支持されていたことがうかがえます。